

草津市立矢倉小学校通信 令和2年9月15日 NO.11



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

チャレンジすること

休み時間になるたびに決まって校長室にきてくれる2年生の子がいる。いつのころからか「この問題を解いてみる。」「校長先生、答えは言わんといてな。アウトならアウトでいいし。」と、校長室にあった一つ上の学年の算数問題に挑戦するようになった。うまくできるのかと心配してようすをうかがう私と目が合うと、「これ、どうするの?」「これはこれでいい?」と尋ねてくる。私はついつい調子に乗って、「どういうことか、お話してみて…。」「いやいやちがうちがう。問題文を声に出して読んでみてごらん。だから、どういうこと?」と、絵に描かせたり、説明させたりするようになっていった。その子は常に自分なりの解釈を言葉にし、あれこれ説明するものだから、筋が通っていなかったり、勘違いをしていたりすれば、私はすかさずそこをつっこんで質問し修正していった。そんなやりとりが続くうち、互いに言わせたいことと、相手が言っていることにズレが生まれていく。うまく理解できていないなど見て取ったときは自然とむきになってしまう。そしてしまいには、問い詰め、問いただすような厳しい口調になっていくのである。とたんに沈黙がつづき、一瞬、やる気をそいでしまったかという不安と、どうかこのことがストンとわかってくれますようにと祈るような気分になる。と、その子はじっと問題用紙をみつめ、にやりと笑って叫んだ。「やったあ、これで全部○になった。ねえここに100点って書いて!」台紙を持ち出し、100点と朱書されたプリントを綴じ込みながら、「またあした来るね。一緒にしよな。」と校長室を出ていく…これがくりかえされるのである。

次の日も、「今日は、だまっといてや。自分の力でやりたいねん。」とやってきた。私としては、こまごまと問いただしたことがこたえたのではないかと案じていたのだが、そんなことにはおかまいなく、「これってどういうこと。これでいい?」とすり寄ってくるのである。自分の力でやると言ったのだから、だんまりを決め込んでやらねばと思うものの、それはそれで意地悪をしているようでもあり、「少しだけ説明するね。」と、心を落ち着かせ、言葉を選びながらやりとりしていった。結果、またしても100点となる。「やったね。」の私の一言に、満面の笑みを見せてくれたのは言うまでもない。

正解へ誘導された末のかりそめの満点ではないかという後ろめたさより、本人にとっては自分で努力した結果の満点であり、達成感、充足感があればこそ、次の日も次の日もチャレンジし続けることができるのだろう。一心になることで、与えられたチャンスを生かし、すこしでもよくなっていこうとするそんな姿勢に学びたい。

校長 大林道範